

日曜日の食卓にて

福島慶子

日曜日の食卓にて

けい.

昭和三十二年六月十日 印刷
昭和三十二年六月二十日 發行

定價 二四〇圓

著者 福島慶子ふくしま けいこ

發行者 車谷弘くるまや ひろ

印刷者 田中末吉たなか すぎ

發行所 文藝春秋新社

東京都中央區銀座西八ノ四
振替口座東京七七八四三番

萬一落丁亂丁の節はお買求めの書店又は發行所にてお取換致します

本文印刷 理想社
カバー他 半七寫眞
製本 加藤製本

目 次

よその宿六たち

七

安井登山の話

三〇

谷崎コリー

四〇

宮田重雄さんと益田義信さん

四四

火事は江戸の華

六〇

續・うちの宿六

八三

「うちの宿六」その後

九四

結婚ブーム

一〇一

悪妻と良妻

一〇五

貴女もやがて未亡人

一〇九

妻に解らぬ夫の心

一三三

倦怠期をどう處理するか

一三七

つよき者ナンジの名は

一三〇

信賴しあうよろこび

一四一

誘惑について

一四四

名もなき葡萄酒のはなし

一四六

御國自慢のたべもの

一五一

フランスの菓子あれこれ

一五六

味の良いパンで

一五九

馬肉と牛肉

一六三

甘味昔ばなし

一六六

婦人雜誌の獻立表

一七二

ほんとうのハイカラ

一七四

ファッション・ショー

一八〇

ころもがえ

一八三

ハサミ

一八六

ほんものの美しさ

一九九

裸で閉じ籠められるはなし

一九三

ややこしいはなし

一九八

春の旅

二〇二

日曜日の食卓にて

よその宿六たち

今回は「よその宿六」のタナおろしをせよとのことですが、人間はなかなか複雑なもので、たとえ自分の亭主でもその生態を突止めるには、起居をともしながらでも長い年月を要します。

まして他人様のこととなりましてはなかなか目が届かず、また人は見掛けによらぬもので、到底その本性をつかむことは出来ません。たとえばヨソ目にはスマートな辯舌家を通つた人でも、自宅では全くの朴念仁で、庖丁をとぐことに依つて辛うじて存在を認められている亭主だったり、世間では有名な學者で通つた名士が、うちでは家族が寢靜まるとコッソリ臺所へ忍び込み、戸棚からカキ餅を出して油で揚げ獨りポリポリかじつて楽しむ癖があつたり、世の旦那族の七癖八癖をいちいち覗いていたら、あたかも昆蟲の生態調べにも似た興味ある發見が續出するに違いありません。

ところで類は友を呼ぶと申しますが、わが家に集まる連中も大體似たり寄つたりの人物ばかりで、主人に似て間延びのした者が多いようです。中でも昔のバリ時代以來、徒黨を組んで遊んで

いる仲間は相當な選手がそろつておりますので、抗議の出るのは承知の上でちよつとその一端をお話ししてみましよう。

神通力のある財布

メンバーは細谷省吾、名倉英二、宮田重雄、益田義信、伊原宇三郎、小寺健吉、大森啓助、伊藤廉、遠山陽子の諸畫伯、久米艶子、一木みどり、石黒敬七、陳清汾の諸氏、およびその家族で、全部集まると三十名を超しますが、多かれ少なかれ毎月一回集まつて遊ぶのを何よりの楽しみにしております。いつでしたか、一同が箱根から熱海に大舉遠足したことがありますが、夜になると會計係の益田さんが盛んに不思議だ不思議だと頭をひねっているのです、みながナンダ、ナンダ、と詰寄ると金勘定が合わぬというのです。調べてみると、これだけの人數で一日遊びまわつたのに財布は一錢も減つていないばかりか、むしろふえているのでした。おかしい、おかしいと大の男が十人もかかつて何べんも計算をやり直しましたが、その通りにちがいないので、一同は大いに氣をよくして「われわれの財布は神通力があるんだね」などと納まつてしまいました。

するとそれまで黙つて見ていた一人の子供が「おじ様たち、けさ、來月の會費集めていらしたでしょ、あのお金は別なの？」ときいたのでアッ！ あれをゴツチャにしていた！ と初めて

わかり大笑いしたことでしたが、このとき今まで寝轉んで天井をにらんでいた陳さんが突然「今日の富士登山は愉快だった、またこんどもやろうよ」と言い出しました。「ええつ、富士登山？」とみなのは腑に落ちかねて問返すと「ウン」とうなずき、「次の富士登山は伊豆の大島がいいや」とのんびりと答えました。陳さんは山遊びのことはすべて富士登山というのかと思います。

別の集まりの時は名倉夫人が立派な福羽イチゴをおみやげに持参され、これを皿に盛つて卓に出すと、そんな事情を知らぬご主人は大いに感心して、「ホーウ、お見事なイチゴでございますねえ、實に大したもの……」と最大級の賞め言葉を盛んに並べるので益田夫人が、「なにいつでいらつしやるのよ、みほ子さんが下さったんじゃないの」とハネ返し一同大笑いしたこともおもし出します。名倉博士は何事も折目正しく丁寧懇篤、つまらぬ事にもいちいち感心して獨りであり「フーム、大したものでございます」というのが口癖ですが、こんなところで日ごろの癖が出てしまつたわけでした。小寺さんは最年長者で村長という異名で通つていますが、いつも笑いながら皆の騒ぐのを傍観しているかわり、突如奇想天外な遊びを提案し、みなも熱心にこれに従います。「八頭身コンクール」とか「おへソの位置」とか「マニユカン歩き」とかいうたぐいのゲームはみな村長の發案で、白髪頭のオヤジ連中が夢中になつて競争するのを娘や息子たちがあ

されて見えています。

綱引で一同ガニ股

昔のことですが、よせばよいのに石黒、福島を東西に分け、残りの者どもが二組に分れてそれに續き、大勢で綱引をやつたことがありました。ところが運悪く直徑一寸もある太い綱が戦争中の粗悪製品、大部分がスフ入りでしたからたまりません。突如ブツリと切れて左右にドノとばかりに尻餅をつき、以後一カ月間というものの全員毎日ガニ股で歩いたこともありました。

宮田さんの診断によりますと、われわれは二十代のころから今日まで、四分の一世紀も同じ仲間と同じ調子で遊び續けていながら、まだ飽きぬ、というのは詰り全員残らず二十五歳ころから知能の發育が停止してしまつたらしいということです。

しかし考えてみますと、このグループはみな自由職業者ばかりの集まりで、會社員、役人、政治家は一人もおらず、いずれも二十五歳の知能で止つておりますから、親も子も入混り數世帯合併して愉快にやつて行けるのかと思います。ご主人ばかり宴會で踊つていても、奥さんが時計とにらめっこしながら茶の間にすわつているマトモな大人たちには、いろんな事情があつて、こんなことも無理かも知れません。

それはとにかく、この集まりも何しろ長い年月の中には多少人員の變動が起るのも致し方ない事でしょうが、今迄のメムバーの中、久米正雄、林重義、佐分眞（映畫俳優ではない、畫家の方です）、田口省吾、一木隲次郎の諸先輩達は既に故人となつてしまいました。（皆さんの靈の寧らかならむ事を）私達はそういう不幸に出合つた時、もう淋しくて集まりを續ける勇氣もなくなるのですが、何時の間にか何となく寄り始めてしまいますし、一方に於ては子供達も成人しましたから、人數としてはそれほど減つては居らぬ勘定になります。

恐るべき兵器

こういう連中がモンパルナスに屯していたあの頃は、日本も一番盛んな時代でしたから、誰しものんきに若さと巴里生活を満喫していたようです。其の頃の畫かき連中も亦今の畫かき連中ほど神經質ではなく、ニースのカルナヴァルに平氣でデラ姿で出かけて行き、踊り狂う群集に混つて「ヤレサ、コレサ、コムサ、セッサ」と西洋の音楽に合せて盆踊りを踊つたりしました。上海事變が勃發した時でしたか、林重義さんがクーポールのテラスで多くのジャポネイを前に並べ、親方らしく言い聞かせるには、何も心配する事はない、日本の海軍は實に恐るべき兵器を持つてゐる、「なんしろキミイ、飛行機の翼から何百という刀が、ボタン一つ押せばサツと出るんや、

それで敵の兵隊が並んでいる上をサーッと飛んでミイ、皆首が空へ吹つ飛ぶんやからな」と言うのです。そして聽いてる者共が「ハハハ、本當かい、馬鹿々々しい」と相手にしない様子を見ると、むきになつていきり立ち「オイ、ホンマヤゾ！」と相手が承知する迄引下らなかつた、という逸話があります。彼のカンバスの鋭い筆捌きの中にはこんな一面は到底探し出せない。私は林さんの畫を見る度に此の「ホンマヤゾ、キミイ」を面白く思出します。田口省吾さんは實にいい人でした。うちの娘の葉子がその時分は未だ小さく、田口と發音出來なかつた爲か、タヌキ、タヌキと呼んでいた事から、遂に友達仲間でも、彼が死ぬ迄タヌキという呼名で通つてしまいましたが、彼は誰の意見にも逆う事を好まず、「勿論だよ、そうともさ、勿論だよ」と言うのが口癖でした。ですから、偶々仲間の意見が對立して、タヌキが審判に當りますと、片方の言い分に「勿論だよ」と合槌を打ち乍ら、片方の言い分にも「勿論だよ」という判決を下します。ではどつちに決めるん、だと傍の者が詰寄りますと、「兩方とも勿論だよ、だからどつちでも構わないや」と言うのが落ちでした。

貨幣の分析

此の仲間には珍しく几帳面なのが、伊原宇三郎さんと伊藤廉さんです。どちらかと言えば伊原

さんは整理家の方で、書籍印刷物の類などは何時もキッチンと整理していますから、何かの資料を探す時など、相談すると大變便利です。伊藤さんの方は調査家で、一つの事をする前に散々豫備知識を蓄えないと、安心出来ぬ性分です。例えばちよつと伊太利へ寫眞旅行に行くにも、案内本は勿論、鷗外の「即興詩人」まで抱え込み、此の本に出て来るこれこれの場所は、何處の町のお寺を見たついでに、何處の郊外電車に乗れば都合がよい、等と一々註を入れて來ますので、歸つて來る時は、立派な日本人向きの案内書が出來上ります。此の「即興詩人の案内本」は大層よく出來ていたので私が借受け、富永惣一さんや佐藤敬さんも大いに利用しました。ところがみんなが便利がり、次々と持廻つてゐる間にどこかで迷子になり、とうとう失くしてしまつたのは何としても申譯ない事です。伊藤さんはこんな性分なのに、仲よしの宮田さんは正反對の大ざつぱで、いつも騒ぎは大きいけれど細かい手順を踏むのは全く苦手です。二人は確か日本から一緒にやつて來たと記憶しますが、當時は若かつたので、氣もわくわく、巴里に着いた翌日、直ぐ芝居を見ようという事になり、西も東も判らぬのに、二人でコメディ・フランセーズか何處かへ出かけたそうです。宮田さんの方は、どうせ解るわけもないから、唯雰圍氣を見物するぐらいの氣持だつたらしいのですが、伊藤さんの方は、プログラムをかうと早速字引と首引で研究に取掛り、外題は「貨幣の分析」という事を理解したそうです。誰でも經驗するように、二人は日本で幾らかフランス語を勉強して來た筈ですが、巴里で耳にするフランス語は調子よく吞込めず（到着の翌

日誌は無理もないのですが、舞臺で何が進行しているのか、皆目見當が附かないのでした。というのも外題からしてしかつめらしい芝居の筈であり乍ら、観客はゲラゲラ笑うし、俳優の仕草は滑稽で、貨幣の分析に關連のある様な氣配は全然認められないのでした。如何に何でも多少何か掴める筈だと思つて居たのが、すつかり當が外れ、大いに失望して其の夜は氣が浮かなかつた、——やがて時日が経ち、二人が巴里に慣れてみると、馬鹿々々しい事に、あの外題は「貨幣の分析」ではなく、*Analyse de Piece* つまり「梗概」或いは「筋書」という意味だつたと判り、初めて合點の行かぬ芝居だつた事を合點したそうです。其の時分は皆若く、益田義信さんや陳清汾さんはまだ獨身で、またこの仲間入りはしていなかつたけれど岡本太郎さんも確か十八ぐらいの少年、原智恵子さんはもつと小さく十三、四ぐらいだつたと記憶します。何といつてもあの當時が我等生涯の最良の年にちがいありませんでした。

巴里の空の下

畫家高島達四郎、俳優早川雪洲、目賀田綱美、山口彦一郎、石黒敬七の諸氏はこれより一時代前から巴里に屯していた連中です。早川さんはラ・バタイユとかジェイ・チュエとかいう日佛合同映畫を作つたり、モンテカルロで大損をしたりして、兎角派手な話題を流していましたし、目

賀田さんは四年間、一日も缺かさず毎日規則正しく、朝は午後二時に起き夜は午前四時に寝て、ダンスを踊り續けていました。その當時は午後のお茶の時間に、ホテルの廣間やダンスホールなどでデー・ダンスが行われ、これに集まるのがエレガントな流行であつたし、夜は夜で派手な料理屋の夕食時にも音楽やダンスを添えるし、夜更にかけては無数のキャバレーが一齊に蓋をあけ、所に依つては明け方まで營業を續けるといつた風潮でした。ですから巴里中の踊り場を一つ残らず踏んで歩こうというには四年の月日も掛り、晝過ぎに起きて朝方眠つて暮したのも無理はありません。その代り、目賀田さんの顔は巴里の踊り場ならどんな所へ行つてもたいしたもので、國際社交ダンスのコンクールでもあれば、頼みもしないのに、唯一の東洋人の審査委員として必ず玄人側に組込まれる程でした。目賀田さんにはダンス以外は何一つ興味がなく、二十代の若さから六十に間近い現在まで、一貫してダンス一點張で押し通しています、特に當時の熱心さは一一般の日本人の目に、金と時間を持て餘したドラ息子子の道樂としか映らなかつたようです。とかく日本人は他人の暮し方が氣になつたり、癢にさわつたりする癖がありますが、此の場合も例外でなく、或る時一人の出張旅行の役人だつたかと思いますが、偶々カフェーのテラスで目賀田さんと出會い、仲間の者も居る前で「君は一體巴里に何をしに來ているんだ？」と皮肉な調子で問詰めました。一座はちよつと白けたけれど、此の時目賀田さんは少しも騒がず、「遊學に來ております」と答えたそうで、このやりとりは當時の日本人間で忽ち評判となつたものです。